

武蔵野日曜聖書講筵 復活節祈禱会

聖霊の次元

――コリント後書第5章11～19節――

1991年3月31日

小池辰雄

夢こそ本当の現実 移ろわざるもの ドラマの中に自分を投げ入れろ 十字架と聖霊は楕円の
二焦点 本当の現実天国の夢 聖霊の次元はすごいところ

【コリント後書5】

11かく主の畏るべきを知るによりて人々に説き勧む。われら既に神に知られたり、亦なんじらの良心にも知られたらと思う。12我らは再び己を汝らに薦むるにあらず、ただ我等をもて誇とする機を汝らに与え、心によらず外貌によりて誇る人々に答うることを得させんと為るなり。13我等もし心狂えるならば、神の為なり、心慥ならば、汝らの為なり。14キリストの愛われらに迫れり。我ら思うに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり。15その凡ての人に代りて死に給いしは、生ける人の最早おのれの為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のために生きん為なり。16されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、かつて肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯の如くに知ることをせじ。17人もしキリストに在らば新に造られたる者なり、古きは既に過去り、視よ新しくなりたり。18これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我らに授け給えり。19即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負わせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給えり。

●夢こそ本当の現実

皆さんの感話・証言、どれも大変ありがたく承りました。しかも、それぞれでありながら、ある一点に向かって非常に皆さんが前進の意気を燃やして居られる。大変うれしくあります。これはやっぱり、み霊の力がそれぞれを、それぞれでありながら、一点に結んでいらつしやるということを感じました。こういうことは、み霊のない世界では起きない。さすがはキリストのみ霊であると。しかも、霊的傲慢にはならない。これは十字架が土台になっている。言わず語らずのうちに、一つになっていることを感謝しております。

13我等もし心狂えるならば、神の為なり、心慥ならば、汝らの為なり。



この「心狂えるならば」という訳のギリシヤ語の元の字は「エクスターゼ」、
「エクスタシーの中に入っている」

という字です。次元の違った霊的状态、これが「心狂える」ということ。普通の人にはちよつとおかしく見えるかも知れないが、そうじゃないんだ。神さまの現実、これは普通の現実とは違う。

実は、私は詩の方もじりじりやっているわけですが、私は夜の夢の中で時々、非常な現実を示される。これは普通の現実と違う現実です。そういう夢とそれから本当に次元の違ったところの、眼が覚めている時の夢とある。いわゆる夢が夢でない。それで私は、

「夢こそ本当の現実である」

ということを非常に詩の中で示されている。夢がもし本当の現実でなかったら、いわゆる夢になったら、それこそ

「空の空^{くう}なるかなすべて空なり」

ということになる。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフという、このヨセフが夢見る男だった。空想でないんです、これは。実^じ想^{ぞう}なんだ。キリストは霊界に今も生きて在りたもう。普通の人にはこれは分からんです。その現実が本当の夢の現実なんです。だから、夢とこの霊が、霊^{れい}的^{てき}現^{げん}実^{じつ}が夢なんです。霊^{れい}的^{てき}というか、御霊の現実です。

だから、神さまの最後の新天地は、どういう形だかは知らないけれども、必ず来る。しかも、その現実は今我々の地上の現実と関わりがないわけでない。大いにある。武蔵野に育った人たちは、天界に往くと、素晴らしい武蔵野にいく。皆、その故里に。それはダンテの天国とちよつと違う。あそこは光ばつかりの世界だけれども、もつと現実なんです。

●移ろわざるもの

それは、移ろいゆく我々の相対的現実の奥に、それが一つの徴、シンボル（シンボル）として本当の現実を予表しているんです。例えば、この花でもそのうちに枯れる。けれども、これは天国では、天国の花は凋^{しお}まない。こういう移ろいゆく現実において、移ろわざるものが現れている。それはゲーテが、

„Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis,“

と言った、あの言葉がそれなんです。

「すべて過ぎゆくものは

過ぎゆかざるものの映像である。」

と。さすがはゲーテだね。私はゲーテの『ファウスト』の最後のあの「神秘の合唱」というのはすごいと思う。あれは全部、本当の現実を言っているんです。

「満ち足りざりしもの」



ここに円現し、
名状しがたきもの
ここに成就せり。」

と。

「そこ（地上）で達せられないものは、
ここ（天国）では現象している」

と。さすがはゲーテだね。とにかく、ダンテとゲーテというのは凄いですが、この詩人は両方とも。儂^{はかな}くなってきた。藤井先生あたりの理想主義はまだそれでなかった。先生は、しかし、かなりその現実の中に、天的現実の中に入ってはいらつしやいましたけれども。まだ理想主義的な角度が強かった。

「理想を選んで現実を棄てろ」

という。理想と現実が二段構えになっている。ところが、本当の世界は、いわゆる理想と現実とは、本当の現実だけなんです。移ろいゆくものの中に、移ろわざるものを本当に見ているか。パウロも、あるところでは、そこまでは行っていない。

●ドラマの中に自分を投げ入れる

キリストは地上でもって、移ろいゆく現実で移ろわざるものを現しておられた。大変な人です。だから、福音書というのは凄い。全聖書の中心はどこかと言えば、それは福音書です。キリストの現実です。十字架・復活する前にもうキリストは、その伝道の現実において永遠を現していた。イザヤ書35章を實現しておられた。全部あれは徴なんです。

ラザロはまた死んだでしょう。けれども、ラザロの復活において、もはや死なないところの現実をキリストは予表しておられた。柩^{ひつぎ}に手をおけば、中の人が甦^{よみがえ}ってくる。そんな人がいますか。いや全く大変な方です、キリスト、イエスというひとは。あなた方はああいう所を読んで、ぶつ倒れなければ、本当は。読んでいて、

「参りました!」

と。そして、

「主さま!」

と言って、しがみつきなさいよ。力が来るから。

「そうか、そんなこともあったか」

じゃないですよ。だから

「ドラマの中に自分を投げ入れろ」

と、もう口がすっぱくなるほど言っている。

聖霊の次元は、もの凄い深さと高さと広さをもっている。

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかにばかりなるかを悟り」（エペソ



3・18)

とパウロも言っているでしょ。あの通りです。それは、どんな仏教の本を読みましても素晴らしいですよ、どれもなかなか。けれども、キリストの現実はどう一つ凄い。御霊のこの現実には本当に宇宙的ですよ。

これが、

「心狂えるなり」

です、私の今言っているのは。眼が覚めていても、本当のエクスターゼの中に入っているわけだ。異言だの、靈歌を言っているんじゃない。本当の靈的な現実というものは、眼が覚めていても大丈夫なんだ。だから、もう相対的な人間的な問題は、

「ああ、どうでも結構。ああ、そうですか」

でみんな済んじゃう。何も抗弁する必要はない、何も弁解する必要はない。そんなことを問題にしているのは、お気の毒さまだ。それだけのことはなしです。

●十字架と聖霊は楕円の二焦点

ある人が私に話した。その人の両親は両方ともキリスト教に対してアンチ（反対）だった。その人は、ある時は、

「もうこんな家に居てもしょうがない」

と出して出てしまったこともあるくらいだった。ところが、親父は病気になって、血尿が出て入院しなければならぬと言ってきた。そうしたら、その人が

「じゃ、お父さん、祈って上げるよ」

と電話で祈ってやった。そうしたら、血尿が止まってしまった。病院にいったら、入院する必要はないと言われた。そのお父さんは参ったね。やっぱり自分の息子は本ものだと。お母さんもある病気に罹った。これは現実にはその人がたまたま行っていて、これを祈ったら治ってしまったという。これは聖霊の次元がいかに凄いものであるかを実証している。理屈じゃない。事実が証明した。相手を助けてしまった。

無教会では、そういう事は起きないです、私の過去の経験において。私がある人の脊椎カリエスを治した時に、

「何ぴとにたぶらかされたか」

と無教会のある先生が雑誌にまで書いた。その先生は終りに、

「私の伝道は間違っていた」

と告白した。私は先生方を尊敬しますよ、それぞれ。大事なことをなさいましたから。けれども、聖霊に逆らっているのか。聖霊を批判しているのか。知らんよ、ぼくは。私はひとつも人を裁かない。キリストがいいようになさる。

ところが、聖霊の力を非常にいただいた、ある人(甲)の友達(乙)が素晴らしい働きをした。



ところが、十字架を忘れた。霊的傲慢になった。その霊的傲慢になった乙の人は、甲の人とは非常に仲が良かったのだが、これがもうサヨナラだ。そのグループとはサヨナラ。霊的傲慢はサタンですからね。

キリストの十字架と聖霊は、楕円の二焦点です。我々の歩みはこれを中心として歩いている。十字架を忘れて、聖霊だと思ったら、今度は聖霊から悪霊に変わってしまう。霊が切り変わる。この土台をするためにキリストは——ルカ伝12章の50節のところだ、

「されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い^{せま}遍る^{いかばかり}こと如何許ぞや」

というのがこれなんだ。あの時にひたむきにキリスト向かっていたのはマグダラのマリアです。キリストの十字架の足にしがみついたらいいね。

「この火燃えたらんには、われまた何をか望まん」

聖霊がお前たちの中に燃えたらもう何も要らんぞ、一切である」

と。「聖霊」という言葉は、私は無教会時代に時々聞いていましたよ、

「どういふんだらうなあ」

と。内村先生も、アメリカ人の聖霊の素晴らしい器が来て伝道したら、

「ああ、こういう伝道者なら来てよろしい」

と、先生はむしろびつくりしたんだ。内村先生は、聖霊の火花は時々散っていたでしょう。しかし残念ながら——私は先生の悪口を言うんじゃないが——歴史的にどうしてもここに来ているんです。私たちがバトンタッチして、内村鑑三の悲願、藤井武の悲願を継がなくては。藤井先生も——悪口言う人はいないけれども——私は言わざるを得ない。

「先生もまだ手前でした」

と。いわゆる義が強過ぎた。そんなことではないんです。

●本当の現実天国の夢

十字架を負うというのは、どんな迫害も、どんな悪口も全部背負ってしまうということ。その背負う事のできるの、もの凄い聖霊の力があるからです。

¹⁸これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己^{やわら}と和がしめ、かつ和がしむる職^{つとめ}を我らに授け給えり。¹⁹即ち神はキリストに在りて世を己^{やわら}と和がしめ、その罪を之に負わせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給えり。

「和らがしむる」と書いてある。「己と和がしめ」と、何か和睦みたいに言っている。これはもともと「贖い」という字で、

「贖いを受けさせる」

ということですよ。

¹⁷人もしキリストに在らば新^{あらた}に造られたる者なり、古きは既に過去り、視よ



新しくなりたり。

「キリストに在らば」「エン・クリストならば」

ということとは、

「御霊のキリストと一つになるならば、御霊のキリストの中に入ってしまったているならば、御霊のキリストに抱かれているならば」

ということ。この「新しい」という字は、古びない新しさという「カイナー」という字です。カイノスの世界は常に新たなんだ。

「古きは過ぎ去り」

といったって、古きはなかなか過ぎ去らないよ。残っている。いいよ、そんなものは、残っていたって。気にするなと。

「本当の意味では過ぎ去っている。相対的現実では、あつたって、そんなものは気にするな」

と。それでもう、しょっちゅう光の方を見ているから。イザヤ書35章の――目の見えない方がもう目がはつきり見える。私の母ももうそうになっている。跛者は鹿の如く跳び、聾者は耳が聞こえる――それをみんな、キリストは全部地上でなさったじゃないですか、イザヤ書35章を。死人まで甦らせてしまったではないですか。

「私は永遠の生命だから、こうなるよ。一遍は死ぬだろうけれども、ところがどつ

こい本当は死なないよ」

と。非常に輝かしい次の世界が待っている。

「本当の現実はその夢である」

という。本当の現実とは夢である。

●聖霊の次元はすごいところ

ところが、今の若い人達はこの夢を持たない。いわゆる相対的現実でもって何だかんだやっている。とらわれている。相対的現実にとらわれている。若い人が悪いのではない。教育者が、親が、文部省が、文部大臣がわるい。文部省なんていうのは政治から離れて、司法省みたいにはつきりと独立しなければダメです。私は詩の中にみんな書いてやるから。

「わが名のために憎まれん」

という。

「ああ結構でございませう」

と。本当の素晴らしい輝かしい天国的現実を地上でもって、我々はパラダイスを現じつつ歩いていかなければ、つまらないよな。

太陽が照っていないくたつて、キリストの光が照っている。黙示録に、

「日月の照らすを要せず」



と書いてある。これはイザヤ書にも書いてある。

「神が、キリストが、その光である」

と。光のものは火だ。霊的傲慢な奴は、この火で焼き尽くされてしまう。火はもの凄い審判と、もの凄い恵みと両方持つている。地獄の火に行ったら大変だ。

日本人は、火山国だからね、火山的な人間にならなければ。温泉を湧き出させているような。「あの人のわきに行く」と温かいなあ、温泉みたいだ」

と。

「一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり」

と。もう死を乗り越えた。今度は、キリストはすべての人のために生命を現した、

「その生命に來たれ。我に來たれ」

と言う。

「我に來たれ、我に來たれ。我に歸り來よ、歸り來よ」

と。「ヤーシュブ」(歸り來たれ)という。

だから、聖霊の次元というのはすごいところだなあと。「聖霊」という言葉が躓きになつては困るよ。

「聖き霊だから、私はなかなか聖くなりません」

なんて、何を言っているか。そういうことじゃない。

「いわゆる現実とは分かれたところ」

というんだ、この「聖き」「カードーシュ」という字は。莊嚴なる世界です。一切を贖い尽くして、全部こうして、さっきの「似我蜂」^{じがばち}「じゃないけれども、いろんなものをそれに化してしまうんだから。ジガバチになつてくださよ。」

「ジガジガジガ」

と、相手をみんな我に似さす、聖霊の我に似させてしまうんだ。「似我」^{じが}という。この「我」は我々の普通の我じゃない。キリストにおける我です。ありがたいですね、みたまの世界は。要するに、

「十字架の門に体当たりしてぶつ倒れると、扉が開かれて入る」

いつも申し上げているとおり。降参すると、その世界に入れる。

「分かるの分からないの」

と、そんな事ではない。

では、祈りましょう。

